

銀行貸し出しのインターバンク金利弾力性と長短貸し出し比率

広島大学大学院 村上恵子

本研究の目的は、日本銀行によるハイパワードマネーの制御可能性が民間銀行の長短貸し出し比率に依存することを理論的、実証的に明らかにすることにある。

周知のように、日本銀行がハイパワードマネーを厳格に制御しようとするれば、短期的にはインターバンク金利の大幅な変動を招く。Ueda (1993) は、現在の銀行行動を前提とした場合、日本銀行によるハイパワードマネーの制御が、月レベルでインターバンク金利を3桁のオーダーで乱高下させることを明らかにしている。また、翁 (1993) は、イタリア銀行による過剰な資金供給がオーバーナイト金利を0%に近づけた例や、スイスの流動性規制が短期金利を50~100%に跳ね上げた例を挙げ、ハイパワードマネー制御の困難性を主張する。

翁 (1993) は、ハイパワードマネーの需要がインターバンク金利に非弾力的であることが、インターバンク金利の変動を大きくし、ひいてはハイパワードマネーの制御を困難にしている理由であると主張する。そして、ハイパワードマネー需要のインターバンク金利非弾力性は、基本的に後積み方式であるわが国の準備預金制度が原因だと考える。

それに対して、本研究では、その原因を銀行貸し出しのインターバンク金利非弾力性に求める。一般に、民間銀行の準備需要は、預金残高に規定される。わが国では、民間銀行の主な資産は貸し出しであり、預貸率もほぼ安定していることから、準備需要は主として銀行貸し出し残高に依存すると考えられる。すなわち、ハイパワードマネーのインターバンク金利非弾力性は、裏を返せば銀行貸し出しのインターバンク金利非弾力性を意味する。

そこで、本研究では、民間銀行を、都市銀行、地方銀行、その他銀行に分け、それぞれの貸し出しのインターバンク金利弾力性を推定し、銀行貸し出しのインターバンク金利非弾力性を検証する。

次に、銀行貸し出しがインターバンク金利に非弾力的である原因を考察する。本研究では、銀行貸し出しのインターバンク金利非弾力性の原因として、民間銀行の長短貸し出し比率に注目する。銀行の長期貸し出し比率の上昇は、インターバンク資金と銀行貸し出しを代替的と想定する教科書的な銀行行動モデルの修正を必要とする。本研究では、標準的な銀行行動モデルに、インターバンク資金など短期資金を長期の貸し出しに運用することのコスト(金利変動リスク等)を導入する。その結果、銀行の長期貸し出し比率が高まるにつれ、銀行貸し出しがインターバンク金利に非弾力的となることを明らかにする。

最後に、上記の銀行行動モデルから導かれた、銀行貸し出しのインターバンク金利弾力性と長短貸し出し比率の関係を検証する。実証方法としては、カルマン・フィルターを用

い、貸し出しのインターバンク金利弾力性の時系列的変化を調べる。そして、貸し出しのインターバンク金利弾力性と長短貸し出し比率の時系列的推移を比較する。ここで得られた検証結果は、ハイパワードマネーの制御可能性に次のような示唆を与える。すなわち、民間銀行の長期貸し出し比率の上昇は、貸し出しのインターバンク金利弾力性を低下させ、ひいては日本銀行によるハイパワードマネーの制御をいっそう困難にさせる。

引用文献

翁邦雄（1993）『金融政策—中央銀行の視点と選択—』東洋経済新報社

Ueda , Kazuo (1993), “A Comparative Perspective on Japanese Monetary Policy: The Short-Run Monetary Control and the Transmission Mechanism,” in Kenneth J. Singleton ed., *Japanese Monetary Policy*, Chicago: The University of Chicago Press, pp.7 - 29.